

日台青年交流事業 2014年5月26日～6月4日

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため、様々な招聘・派遣事業を実施しています。本年は5月26日から6月4日まで台湾で東アジアを対象とする地域研究（国際関係や安全保障等の人文科学分野）を学んでいる大学院生20名を招聘し、日本人大学生との学術交流、文化施設視察、ホームステイ、着物体験、世界遺産熊野古道のトレッキング等、学術面と文化面から日本を理解するプログラムを体験してもらいました。多くの学生が、人生を大きく変える程の感動を得たと語っています。今回は男性2名女性2名の報告書をご紹介します。

「台湾大学院生訪日団」の感想

東海大学財務金融研究所
修士課程2年 張嘉恬



光栄なことに、交流協会主催の「台湾大学院生訪日団（東アジア研究）」という事業に参加することができました。スケジュールは大きく学術交流、公的機関訪問、文化体験の三つに分かれていました。

まず、学術交流では院生一人ひとりが三つの大学で研究報告を行い、三校の先生、学生たちと学術交流をしました。三校とは、それぞれ東京大学、

神奈川大学、京都の立命館大学です。私が学んでいる分野は財務、金融で、他の学生の政治、経済、法律といった背景とはやや異なっています。私たちの分野はある研究について研鑽を深めていく傾向にありますが、他の学生は多くが国家政策や国際比較などを行い、比較的広い分野にまたがる問題を研究しており、私の専攻分野とは大きく違っています。そのため、多方面の分野にわたる知識を持っていなければならず、政治、文化、社会環境など、広い範囲で知識を吸収して自分の専攻と結びつけなければ、深い部分で根本的に問題を解決できないのだということがわかりました。

また、国内外のトップレベル大学の学生と交流すると、いつも自分に英語、日本語などの言語能力が足りていないことに気づきます。他の学生が軽々と英語で質疑をしたり、外国の学生と会話したりしているのを見ると、なおいっそう、言葉というものは専門分野よりも長い時間とエネルギーを割いてしっかり練習しなければならないものなのだという事を思い知りました。

東京大学東洋文化研究所の松田康博教授の講義も印象深いものでした。先生の中国語が台湾なまりだったほか、研究テーマも非常に深く、日本と中国、台湾と日本、台湾と中国の関係などを研究されていました。学校でもよく先生や学外からの講演でこれに類する分野の問題が語られますが、



松田教授は日本人の角度から検討した上で独自の見解を持っており、文化の違いなども考えることができて非常に勉強になりました。

三つの大学のキャンパスも個性的でした。東京大学はどちらかというと古風で、旧式の建物と西洋建築が融合していました。立命館大学はすべて現代建築が主となっていますが、建物はそれほど高くなく、威圧感ありませんでした。神奈川大学の建物は実に独特で、開放的な空間はアメリカのハイテク企業の見学に訪れたような気分になります。スケジュールがつまっていたので、キャンパスを見学する時間がなかったのが少し残念でした。

二つ目は公的機関訪問です。今回は国会議事堂、経済産業省、防衛省防衛研究所、科学技術振興機構、立命館大学国際平和ミュージアム、ホンダ自動車傘下の鈴鹿オートリサイクルセンター、鈴鹿サーキット、本田技研鈴鹿製作所などを訪問しました。政府機関と民間組織の両方があり、政治、経済、産業、社会等の多方面にわたっていました。

初日は、飛行機を降りてすぐに国会議事堂を訪れました。日本の立法機関の仕組みはと台湾と異なり、参議院と衆議院があります。建物もそのように区分され、左側が衆議院、右側が参議院と、対照的な建物になっています。会議場の設計は台湾と似ていますが、日本の方が、歴史的味わいがあります。ユニークだったのは、案内係の方が、建物の大部分が国産品で作られていることを強調していたことでした。日本人の自国製品に対する自信が隠されているとも言えるでしょう。台湾も見習うべき部分だと思いました。

二日目は経済産業省と防衛省防衛研究所でした。経産省では主にアベノミクスの三本の矢の政策について説明して頂き、防衛省ではそこでの業務や研究、学生が事前に提出した質問への回答などがありました。経産省も防衛研究所も、職員の方は議題を語る際にも質問に答える際にもプロとしての姿勢が現れており、少々敏感な話題につい



ても中立の立場で過激な言葉を使わないように気をつけておられました。私にとって、このことは大きな衝撃で、この対応の技術を学ばなければならないと感じました。

訪問先の中では、国際平和ミュージアムも強く印象に残っています。人々は時間の経過によってほとんどが戦争の恐ろしさと残酷さを忘れるか、そもそもそのことを知りません。立命館大学は国際平和ミュージアムを設立し、第二次世界大戦の状況のほか、国際的非難を浴びたある戦略、戦争の恐怖の警告、戦後の民間の生活についても分析をしていました。また、世界的な飢餓問題、世界平和への願いなどが展示されていました。館内で解説員をしているボランティアの方は戦争を経験したお年寄りで、説明を聞いていると戦争の残酷さと経験者の辛さをこれでもかというほどに感じました。それに加えて、日本の歴史的立場は他の戦争経験国とは異なり、日本が受ける圧力も並一通りではありません。それでもなお、ボランティアの方々は子供たちが過去の傷を忘れないように自分たちが語り聞かせ、平和のために力をつくすことを願っておられます。

最後の訪問先はホンダ傘下の鈴鹿オートリサイクルセンター、鈴鹿サーキット、本田技研鈴鹿製作所でした。自動車の研究開発、生産から解体、廃棄に至る一連の業務がグループ企業内で完結す

るようになっており、このことも日本が自動車産業でトップに立っている要因の一つとなっています。初めて自動車の生産ラインを見学しましたが、一つの作業場で自動車一台を組み上げることができ、省スペースが実現されているだけでなく、ロボットアームと手作業の連携で生産のスピードと管理の効率を上げることができています。日本の三大メーカーの生産量がトップスリーを固めているのも不思議ではありません。ホンダがレーシングチームを所有することは、新型設備が研究開発できる以外にも、会社の露出を増やす機会にもなります。最後に、オートリサイクルセンターは製品が再販できる品質を保つために、主に手作業によって解体を行っています。そのため、一日に処理できる自動車の数は生産量に遠く及びませんが、自動車の資源をほぼ百パーセント利用できます。これは台湾企業も参考にすべきお手本だと言えるでしょう。将来的にさまざまな資源が不足する可能性の中で、いかにして生産エネルギーを減らし、製品の処理コストを下げるかという問題は、企業が利益を上げるにあたっての基本となるでしょう。

三つ目の文化体験で最も印象深かったのはホームステイ体験と和服体験、伊勢神宮参拝でした。顔寧さんと私は住職さんの家庭に宿泊しましたが、日本人でもそのような体験をしたことのある人はいないでしょう。私も顔寧さんも日本語はあまり上手くありませんので、コミュニケーションができないのではないかと心配していましたが、住職さんご夫妻がとても良い人で、付き添いのために中国人留学生を二人見つけてくれていました。住職さんの家は築五百年を超える歴史あるお家です。家に着くと、さっそく住職さんと奥さんと一緒に夕食の準備をしました。奥さんはとてもかわいい方で、中国語を勉強されているそうで、翻訳機で単語を調べたり、本当に真面目でした。夕食はあまりにも豪勢で食べることができない



ほどでした。その間も二人の留学生がご夫婦との会話を助けてくれて、とても楽しく過ごしました。床に座ることに慣れなかったことを除いては（笑）。翌朝は六時に起きて、住職さんがお経を唱えるのを聞き、朝食後は奥さんに夫婦岩に連れて行って頂きました。後になって三重県を巡っているときに初めて政府公認の観光地だということを知りました。以前にテレビ番組で見たことのある皇室の宿泊所も見学しました。敷地は大きくはありませんが、内部の建物と花園は非常に上品で美しかったです。初めてホームステイを体験し、住職さんご夫妻に暖かくもてなして頂き、中国人留学生二人に助けてもらい、お別れのときは本当に名残惜しく思いました。また機会があれば、もう一度住職さんご夫妻と中国人留学生たちに会いたいです。

もう一つ印象深かったのは、着物を着ての伊勢神宮参拝でした。その前の数日間、台北事務所のCさんがずっとその日は最高気温になると言っていました。皆はこのめったにない機会、絶対に着物を着ようと心に決めていました。しかし、着物体験をして、木陰の多い伊勢神宮を参拝できたのは本当に幸運なことでした。それほど暑くはありませんでしたが、草履を履くと歩くのが本当に遅くなって、階段が辛かったです。昔の人は本当にすごいです。



最後に、今回の訪日団に参加させていただいた交流協会に改めて感謝を申し上げたいと思います。とても楽しかったのと、それ以上にたくさんの衝撃を受けました。文化、人文、学術、政府機関、産業の発展などだけでなく、自分がもっと強くなり、もっと多元的に考えられるようにならないといけないことを知りました。自分の国と、専攻分野だけにとどまっていたはいけません。交流協会の事業のおかげで、新たな自分を知ることができ、これからの努力の方向と目標が見つかりました。

交流協会の T さんと C さんの事前の手配、道中の様々な連絡と事後の事務処理などのおかげで、無事に日程を終えることができました。ずっと引率してくださり、自分たちの優れている部分を教え、たくさんのことを教えてくださった曾先生、ありがとうございました。H さんの通訳は言葉にならないくらい素晴らしいものでした。どんな分野のことでもすぐに訳してくださり、助けてくださったことを本当に感謝しています。最後に、訪日団の皆さんにお礼を言いたいです。違う学校から来て、専攻も異なりますが、今回の活動を通して皆と知り合うことができ、親友になれたことはとても幸運で幸せなことだと思います。どうもありがとう。皆さんがこれから未来の舞台で輝かしい活躍をすることを願っています。

台湾大学院生訪日団（東アジア研究）の感想

国立中興大学国際政治研究所
修士課程 2 年 陳詩佩



出発前

今回の十日間の日程を目にしたとたん、これ以上ないほどに興奮してきました。いくつかの重要な機関を訪問する他、歴史、文化体験まであります。最も重要なのは、日本のトップ大学での研究発表会で、私にとって一番緊張し、一番楽しみにしている部分でした。今回は、初めて自分の研究を公に発表し、しかも英語で研究について紹介し、何よりも自分の研究対象である日本で発表するのです。そのため、私は各分野の研究者や学生からの反応やアドバイスを楽しみにしていました。

重要な機関

1. 国会議事堂

初日、東京到着後は国会議事堂に直行しました。台湾の立法院に行ったことがありませんので比較はできませんが、日本の国会議事堂にはある種の厳粛な雰囲気があり、付き添いの方から議事堂の歴史を説明して頂き、国会の沿革なども見ることができた貴重な経験でした。

2. 経済産業省、防衛省防衛研究所

今回の日程を利用して、政策を制定している数多くの公的機関も訪問しました。このことも今回の旅の貴重な点だったと思います。こうした組織には一般人は入ったり見学したりすることはできませんので、大学院生の立場を使って、職員の方に日本の政策と政府の考え方、方針を質問するのはとても貴重な経験になりました。

3. 熊野市役所

三重県の高齢化は深刻で、座談会のときに市長さんから、「どうすればもっと観光を活発にできるだろう?」と質問されました。ある学生が「交通」と答えました。お金を節約したいバックパッカーならば、喧騒から離れた田舎町を選ぶかもしれませんが、旅の予定を立てるときに重要なのは交通の便です。このような方法で、若者の考えを役所に伝えれば、あるいは的確な解決策になるのかもしれませんが。簡単な意見交換ではありましたが、熊野を盛り立てていきたいという市長さんの決意に胸を打たれました。

ホームステイ

私にとって初めてのホームステイで、興奮と不安が高まりました。以前から、日本人はプライバシーを大切にすると聞いていました。友人同士の「今度遊びに来てください」という言葉すら社交辞令だとみなされ、本当に訪問したら日本人を困らせてしまうと聞いていましたので、今回日本人の家庭に入り、一日日本人になることができるのはとても貴重な経験でした。

私のステイ先は一人暮らしのお母さんで、大きな家に一人で住んでいました。夜、私と友人は、お母さんとおしゃべりをし、食事を作り、食器を洗い、食後は一緒にピアノを弾いて歌を唄いました。お母さんには、自分の生活の楽しみを見せて頂きました。自分で庭を手入れし、食事を作るときには家中に響き渡るクラシック・ジャズを流す、とても洋風のお母さんです。しかし、楽しい時間はいつもすぐに過ぎ去っていきます。翌日、お母さんがまた一人の生活に戻ってしまうかと思うと、涙を抑えられませんでした。一日だけのご縁でしたが、また三重県に戻ってきたいと思いました。

着物体験

今回、初めて着物を着ました。日本の伝統衣装を着て伊勢神宮に行くのは本当に特別な気分でした。

ガイドさんによると、最近は着物を着る人もずいぶん少なくなったそうです。お正月ならともかく、こんな暑い日はなおさらでしょう。そのせいで、ずいぶんと注目を集めてしまいました。しかし、伝統衣装を着てみて、これは若者に自分の民族を理解させる優れた方法の一つだということがよくわかりました。「どうして台湾には伝統衣装がないのでしょうか」あるいは、どうして私たちにはそのような文化がないのでしょうか。私たちに欠けているのは外側なののでしょうか。私にとっての反省となりました。

歴史文化

今回、熊野古道、鬼ヶ城など、多くの世界遺産を訪れました。主なものは大自然の景観であるにもかかわらず、文化遺産として登録されているのは、日本人がこれを歴史と結びつけ、数多くの神話や伝説が存在し、自然の景観により多くの価値と意味を与えているからです。台湾もこれに習うべきだと思います。シンプルな物語が、風景を見る観光客が受ける印象をより深いものにしてくれるのです。

新発見

日本に来るのは今回が初めてではなく、見学も初めてではありませんが、感動と衝撃は小さくはありませんでした。そして、この国のことがもっと好きになりました。

1. さようならと言う文化

今回の訪問では多くの方に助けて頂きました。二日間しか会えなかったガイドさん、一日だけのご縁だったホームステイ、三重県での全日程に付き添ってくださった三重県庁職員の山内さん。何度もさようならを言う機会がありました。日本人には、相手が見えなくなるまで手を振り続ける習慣があります。感動という他に形容できる言葉がありません。日本人のおもてなしには、いつも家

に帰ったような居心地の良さと、別れのときの名残惜しさがあります。

2. 省エネと二酸化炭素削減

私の論文のテーマは日本の省エネ政策に関するものなので、その点に特に注意を向けていたところ、多くの公的機関では常時冷房を使っているわけではないことがわかりました。防衛研究所、経産省のオフィス、熊野市の応接室、ホームステイ先のお宅でもエアコンをつける習慣がないようでしたが、だからこそ日本の公務員はネクタイを締めない習慣があるのでしょうか。三重県庁や、一部のレストランの外には小型のソーラーパネルまで置いてありました。観光地として著名な渡月橋の脇にも、毎日どれだけ水力発電をしたかという表示があり、政府機関の屋根はほとんどが一面青

く光っていました。大学の校内のトイレでも、便器の蓋を閉めて便座を温める機能を止め、省エネをしようという張り紙がありました。至る所に「未来の地球は今日の省エネから」という標語やポスターがありました。政策を広報する日本の力の入れ方に敬服し、台湾もこれに習うべきだと思いました。

台湾大学院生訪日団 交流の感想

国立台湾大学 政治学研究所
修士課程3年 潘崇易



一、訪問と学術交流

まず、当然のことながら、始めに公益財団法人交流協会が事業全体を苦勞して準備してくださったことに感謝申し上げなければなりません。台湾の台北事務所も日本側の事務所も、今回の交流事業を全力でご手配してくださり、私たちはこの旅で豊かな成果を得て、印象深い体験をし、そして我が家にいるような親しみを感じることができました。本当に、力を尽くしてくださった交流協会の方と、訪問先の方々に感謝しています。以下は今回の交流の感想で、主に三つの部分に分かれています。第一部は訪問と学術交流で、機関への訪問、講演、学術交流などの内容です。第二部は文化体験とホームステイで、坐禅体験、着物体験、古道トレッキングなどです。最後は全体の感想と提案です。

今回の訪問先には、政府のもの、半政府の組織などがありました。国会議事堂、経産省、防衛研究所、科学技術振興機構、立命館大学国際平和ミュージアムなどです。その中でも最も印象深かったのは、国会議事堂と国際平和ミュージアムでした。初日、飛行機を降りてからの最初の行き



ホームステイ先のお母さんと（松阪市にて）



着物体験（伊勢神宮にて）

先は、霞ヶ関にある国会議事堂でした。国会の内部や普段の運営を間近で見ることができました。この建物は日本の重要な歴史的伝統を象徴していると同時に、日本の細心かつ秩序ある民族性を見出すことができました。日常の公務の手配、議事堂内部の精緻なデザイン、見学の動線のデザインと秩序正しさに驚いたのと同時に、思わず台湾自身の国会の秩序と民主の価値を顧みました。この点は台湾が大いに参考にするべきだと思います。もう一つ、深く印象に残った場所は立命館大学の国際平和ミュージアムです。ここには第二次世界大戦の悲惨な歴史的記憶が保管されており、日本国民の痛切な反省と深い教訓を象徴しています。博物館の文書や実物史料はきわめて豊富で、過去、現在、未来の三つのエリアにきれいに分けられ、日本自身、そして世界の人々に向けて戦争の恐ろしさと、どうやって戦いを避け、手を取り合って未来に進むべきかを訴えています。博物館のロビーにある二つの大きな壁画はそれを象徴しているようでした。鳳凰が戦火の中で火を浴びて生まれ変わり、新しい翼を広げて天に舞い上がっているという図案です。戦争のことから平和を守ることについて、最も貴重で価値のある学びの場となりました。

学術交流の部分では三大学での発表会以外に、東洋文化研究所の松田康博教授の講演を聞きました。私の発表は東京大学に割り当てられました。交流会は基本的に学生が司会をし、テーマはいずれも政治経済に関するものでした。そのため、交流会の後の食事会では、皆自分の研究の難点や収穫を話し合っていました。また、今回は初めて英語で発表をし、限られた時間の中で母語以外の言語で研究のテーマを伝え、聞き手に理解してもらうことはとても難しく、表現の面でも改善の余地がたくさんありました。しかし、今回の交流で学んだこともたくさんあり、貴重な機会を頂けたことに心から感謝しています。また、松田康博教授

の講演も印象深い学術交流の一つとなりました。松田先生の中国語はとても流暢で、お話のテーマも米中二大強国の競争と、東アジア諸国が直面する挑戦と対応というものでした。先生からは学術的な部分、個人として観察したことを教えて頂き、皆からの質問にも丁寧に回答して頂きました。学生同士の意見交換もあり、学術交流がさらに意義深いものとなりました。



写真1 東京大学の学生と

二、文化体験とホームステイ

前半の日程を終え、後半は日本文化体験とホームステイです。三重県庁の温かおもてなしはとても心に残りました。訪問先に行くと、必ず台湾の国旗があり、県庁の方が温かく迎えてくださり、小さな部分から日本人の細やかで親切な思いを感じることができました。また、着物を着て伊勢神宮を歩くのもとても特別な体験でした。着物は初めてで、蒸し暑くて動きにくかったですが、なんといっても着物は日本文化を代表するものの一つですから、着物一式を身につけて、日本の神社で最高レベルの伊勢神宮を見学できるというのは本当に貴重な経験でした。熊野古道のトレッキングも面白く、花窟神社、獅子岩、古道の景色、親切で元気いっぱいのガイドのおばさん、道路沿いの和風建築と菩薩像など、タイムスリップしたような気分になりました。さらに、ホンダ自動車の

生産ラインと自動車リサイクル場を見学でき、日本人の用意周到かつ秩序正しい仕事ぶりに驚嘆せずにはいられませんでした。産業の経営、計画と、夢を持ち続けること、いずれも台湾の産業が学ぶに値する部分だと思います。

ホームステイは、間近で日本人の生活を体験できる機会となりました。私の宿泊先は Y さんのお宅で、典型的な家族のご家庭でした。お母さんは私たちを迎えた後、すぐに車でスーパーに夕食の材料を買いに行き、家でお好み焼きのような夕食を作り、日本の本場の味を体験させてくださいました。夕食後、お母さんは家族写真を見せてくれて、台湾に旅行に行ったときのことを楽しそうに話してくれました。私たちも、自分たちの家族の写真を見せたり、生活のことを話したりしました。翌日の朝食には、日本の食文化を代表する食べ物の一つ、納豆を用意してくれていました。味は想像したほど強烈ではなく、ネバネバしていましたが、口に入れてみると何とも言えないトロツとした触感があり、とても美味しい食べ物だと思いました。また、嚴翔彬と私は空き時間を利用して近所の田舎町を散歩し、様々な建物や静かな通りをたくさん眺めました。これまでに見てきた都会と比べると、ここははるかに静かで穏やかだと思えます。一日だけの短いホームステイでしたが、とても楽しく、思い出に残るものでした。



写真2 着物を着て伊勢神宮を参拝



写真3 ホームステイ先のお母さんと

三、全体の感想と提案

今回、訪日団への参加で、初めて日本を訪れました。こんなにも深く、幅広い訪問の機会を頂けたことをとても嬉しく思っています。日本に対してとても良い印象が残り、また日本に行きたくてたまらなくなりました。日本人の丁寧で真面目な仕事への姿勢、きれいで秩序のある街の様子、親切だけれど押し付けがましくないおもてなし、細やかでしっかりした文化の奥深さには、今回の訪日で一番心に残った体験でした。全体的に言えば、とても大きな収穫があり、楽しい度になりました。しかし、交流の部分では少し改善の余地があります。日本の学生の発表のテーマを事前に知ることができれば、台湾の学生が興味のあるテーマに対する用意ができ、学術交流全体でお互により大きな収穫があるのではないのでしょうか。最後に、改めて最高かつ最大の誠意をもって感謝の気持ちを申し上げます。Cさん、Tさん、引率の曾先生、随行通訳のHさんにはご苦勞をかけました、ありがとうございました。参加したメンバー全員とも、お互いに素晴らしい思い出を作ることができました。

2014 年大学院生訪日交流団の感想

国立政治大学 外交研究所

修士課程 2 年 李丹坪



今日（六月六日）、台湾でシャワーを浴びていると、何のためらいもなく大口を開けて水を飲んでしまいそうになりました。わずか十日間の日本での交流が、私の習慣にまで影響を与えてしまったのです。年配の方や、学校の先輩に会った時に丁寧にお辞儀をして先を譲るようになったのも、きっと日本人の礼儀正しい雰囲気は私に影響を与えたのでしょう。

これは感想文ではありますが、この十日間に見た物、理解したこと、珍しいもの、驚きと名残惜しさを、詳しく、ありのままに記録したいと思います。しかし、何よりもまず交流協会にご手配をいただき、C さん、曾先生、T さん、H さんにお世話になり、詳しい説明と通訳をして頂いたこと、日本を知るために自分たちの税金を快く出してくださった日本の皆さんに感謝したいと思います。出発前に曾先生がおっしゃった通り、本当にたくさんの方が後ろで支えてくださっているおかげで、これだけ収穫の豊かな十日間になりました。

また、旅が思い出深いものになるかどうかは仲間にかかっています。今回同行したメンバーたちは台湾の各大学からやってきていました。交流の合間に私たちはそれぞれ異なる分野の交流をし、見識を広めることができたのはもちろん、もっと楽しかったのは旅行中に様々なことを助け合い、受け入れることで、十九人の友だちができたことです。六月四日、この旅にピリオドを打つことは、本当に名残惜しく思いました。今回の訪日団には、歴史、文化、人々の生活、学術と日本の先進性などが含まれており、そこで受けた感覚は「複

雑」という言葉でなければ形容できません。以下では上に述べたいいくつかの項目ごとに私の見聞きしたことを書いてみたいと思います。

まず、歴史について、一番感慨深かったものといえば何よりも国会議事堂、立命館大学国際平和ミュージアム、東京と京都の街角で見た数々のものでした。国会議事堂は羽田空港から日本に到着した後の最初の目的地で、とても興奮しました。初めて霞ヶ関を訪れ、東京の街並み、通行人の秩序正しい様子に驚かされました。国会議事堂は日本の貴族院です。会議場はすべて木造で、とても高貴で上品なもので、とりわけ日本は歴史の蓄積のとても深い国だということがわかりました。その後、H さんの説明によると、今でも議員たちは文書を布で包んで議事堂に行くのだと聞き、なんて環境に優しいのだろうと感じました。ある国の国会に行くと、歴史制度の選択によって、出来上がる国の形が異なってくるということを思い起こさずにはいられません。英国、ドイツ、日本といった偉大な国が選択したのは内閣制ですが、この制度には高度な安定性、専門性が隠されており、とくに二院制などは台湾が参考とするに値する部分です。

二つ目に、歴史的感慨を深く覚えた場所は、立命館大学の国際平和ミュージアムです。立命館大学は太平洋戦争で多くの学生が招集され、戦争に参加させられました。そのため、ここにこの博物館を建設して、戦争の恐ろしさと平和の大切さを訴えています。台湾人にとって、日本と中国に対する感情はとても複雑です。台湾はかつて中国に属し、日本も約七十年前までは台湾を所有し、台湾人も戦地へと招集されていました。立命館大学国際平和ミュージアムで感じた歴史に対する感慨は、複雑に錯綜しているといえます。この博物館では、慰安婦、南京大虐殺、人体実験等の写真も展示されています。現在、中日台の交流は多くなっており、戦争はもう二度と起こらないことを願っています。この博物館では、日本人が先の大戦のことを

鑑として心に刻んでいることに安堵しました。

三つ目は東京と京都の街で見たものです。台湾に戻った後も学校の友人に、東京は素晴らしい街だと話しています。空間を非常に上手く使い、東京の人々も秩序を守り、街の美観が保たれています。少し注意してみれば、たくさんの歴史的建造物があります。例えば、皇居前の「第一生命」は、マッカーサーが日本にいたときのオフィスで、大きくはありませんが、年月の痕跡を感じさせる碑がありました。日清戦争、日露戦争時代の日本の将校の記念や、東大の赤門なども強く印象に残っています。東京では東京タワーやスカイツリーを間近で見ることができれば、日本文明の偉大さをよりいっそう感じられるでしょう。初めて京都を訪れて、少し驚きました。京都は私が想像していたほど古めかしい街ではなく、高層ビルは少なく、夜もそれほど賑やかでも混雑していませんが、のんびりとした古都の雰囲気が漂ってきます。座禅体験前に、道中でSさんが説明してくれましたが、京都には驚くほどたくさんの神社やお寺があります。幸運にも、平安神宮を訪れることができましたが、とても壮大な規模のものでした。星さんによると、京都の建物が低いのは、住民の自主的な規制によるものであり、これも一つの歴史に対する尊重なのだという事です。

私が日本に来たのは今回が二回目です。高校の頃に初めて日本に来てから、日本は世界で一番観光に向いた国だと強く思いました。日本人は皆礼儀正しく、儒教文化発祥の地である中国、台湾も日本には遠く及びません。単に街を歩いて、買い物や飲食をしているだけでも、どのサービススタッフも礼儀正しく、私が上手く日本語を話せなくても、一生懸命商品のことを教えてくれて、少しも壁を感じることはありませんでした。

他にも驚いたのは、日本人の時間を守る文化です。日本人が時間を守ることは誰でも知っていますが、そこに隠されているのは、他者への思いや

りです。私たちの乗ったバスが早く目的地に到着したのに、対応される方の迷惑にならないように早めに中に入ることはしないといったことが何度もありました。日本の時間を守るというのは、早く着くということではなく、約束の時間の5分前に到着するということです。これはそれぞれの国で時間の感覚が異なることによるのですが、時間を守ると同時に少しの気遣いをするという点は、やはり私たちも見習うべきでしょう。

真面目に仕事をするという文化について、霞ヶ関の経産省を訪問した時に、課長補佐の高木さんによると、霞ヶ関では毎月の残業が100時間を超えることも当たり前で、過労になる可能性が高いですが、日本人の仕事への責任感と、国、会社に尽くしたいという思いに好印象を受けました。日本は二十数年前にバブル崩壊に見舞われましたが、東京は依然として活力ある発展の勢いを見せており、サラリーマンたちの足取りも速いです。高木さんは、経産省が担当している産業のことを説明してくださり、様々な質問についてスラスラと回答してくださいました。日本の公務員の姿勢と能力は、台湾が学ぶべき部分だと思います。

続いては、日本人の生活の体験です。最も印象に残ったのは、なんといっても居酒屋文化です。今回、東大での発表後、東大の学生に渋谷近辺の居酒屋へ連れて行ってもらいました。タバコの臭いがしましたが、退勤後のリラックスした雰囲気があり、話し声も少し大きくなり、友だち同士でビールを飲みながらおしゃべりを楽しみました。東大の学生たちはこのような生活に慣れていても、学校では良い成績を取り続けており、さすがは日本の大学だと感じました。一晩で一軒だけでなく、三軒もハシゴすることがあるそうで、居酒屋ではお互いの距離を縮めることができます。日本では昼間は皆が一生懸命真面目にしていますが、夜になると気楽にリラックスした様子に変わります。

他にも書いておきたいのは、初めてのホームステ

イ体験でした。半数以上の学生のステイ先は、県庁所在地の津市でしたが、とても静かで楽しい土地でした。私がお世話になった家族は、可愛い五歳の娘さんがいる若い夫婦でした。まず、お母さんに夕食の材料の買い物に連れて行ってもらい、帰宅後は娘さんと一緒に近所の公園で遊びました。三重の生活はとてもシンプルで、三世代同居の家庭もたくさんあり、市民はとても楽しく、満ち足りた生活をしています。どれだけお金を積んでも買うことのできない体験でした。夜は、日本の家庭でよく食べるという手巻き寿司でした。真ん中に置いたお皿に刺し身やキュウリの細切り、卵、海苔などを並べ、酢飯と一緒に自分で巻いて食べるもので、とても美味しくて簡単でした。三重県は大規模な都市ではありませんが、日本文化はしっかりと根づいており、とても思い出深い場所でした。

今回、台湾の大学院生訪日団の最も重要な目的の一つは、台日学术交流です。三ヶ所の大学を訪問したほか、東大の松田康博教授に中日台関係についての素晴らしい講演をして頂き、防衛省防衛研究所の三名の研究員の方には質疑応答を、経産省の高木さんからは日本の産業について説明をして頂き、いずれも大変ためになりました。上記の三大学での学术交流では、いずれも少し時間オーバーになり、台湾の大学院生たちも演者とたくさんの質問を投げかけ、それについてもしっかりと回答をして頂きました。やや時間が足りなかったのはとても残念でしたが、台日の友好関係は大いに深まったことがわかりました。

私の東大での発表は、アベノミクスについての研究でした。発表後、日本や中国の学生と討論することができ、学术交流にとってとても役に立つ環境でした。京都の立命館大学での発表会終了後は、幸運なことに元日本交流協会代表の池田維大使から、どうすれば傑出した外交官になれるのかというお話を頂きました。池田先生は英語がとても流暢で、最後には私と後輩に『台湾出使記』というご著書を

下さいました。本当に幸運なことだったと思います。

最後に、最も印象深かったのは日本の進歩的な面でした。東京では、JR、地下鉄が縦横無尽に走り、毎日行き来するたくさんの人に役立つ交通手段となっており、どこへ行くにもとても便利です。新幹線で横浜から京都へ行くときには、名古屋にしか停まらない特急にりましたが、日本の効率に対する追求を見て取ることができました。訪問先の中で、エアコンの温度が低すぎる政府機関は一つもなく、三重県議会であっても室温は三十度以上で、窓を開けて自然の空気の流れて温度を下げるようにしていました。

日本の生活では多くの製品が電子化されており、炊飯器や、ラーメン屋の食券機、ホテルのチェックイン機など、日本人が色々な手段を考案してテクノロジーを生活に役立てているのを目にしました。同時に、日本は先進文明国としての責任も忘れていません。例えば、私たちが頂いたほとんどすべてのパンフレット、報告書のコピーなどは環境保護のため再生紙が使用されており、民間での資源回収もとてもきれいにしています。買い物をするととてもきれいな包装をしてくれますが、リサイクル可能な材質で作られていました。これらは、先進国として進んで負担している責任であり、日本のやり方は素晴らしく、先進国を目指す国はこれに倣うべきでしょう。

この感想文を書いている今、私はもう今まで行ったことのない日本の街へ旅行に行く計画を立てています。この十日間、日本にはあまりにもたくさんの思い出をもらいました。これからも、私たち若者の力で台日双方の友好、距離、歴史、文化といった関係を推進し、台湾と日本が最高のパートナーとしてこの関係を続けていければいいと思っています。最後に、このようなすばらしい交流の機会を下さった交流協会に心から感謝を申し上げます。これからも、私は友人に、日本が偉大な国であることを伝えていきます。